

興国寺天狗堂

興国寺の天狗堂には、大火後に一晩で寺院を再建したと信じられている伝説の天狗が祀られています。天狗は、伝統的な民話や文学に登場する鳥のような鬼です。彼らは翼やくちばしなどの鳥類の特徴を持って描かれることが多く、最も強力な天狗は羽でできた魔法の団扇を持った姿で描かれます。

祭壇の後ろに飾られた大きな天狗の面が天狗堂の目玉です。高さ2・4メートル、幅2・7メートルで、京都の人形師2人が彫ったものです。金色の目にはいった大きな黒い瞳を持ち、大胆な赤い顔と細長い鼻と対照的です。天狗の視線は、祭壇の前に足を踏み入れる参拝者に焦点を当てているように見えます。お面と一緒に大きな木製の塗装された団扇が祭壇の横に置かれています。

地元の言い伝えにちなんでこの寺では天狗が祀られています。火災により寺院が全焼した後、放浪の僧侶が近くの山からやって来て援助を申し出、寺の僧侶と村人が家に帰って夜明けまでそこに留まるという条件で寺院を再建すると約束しました。翌日目覚めると、寺院は再建されていましたが僧侶の痕跡は見つかりませんでした。彼らはこの偉業は全能の天狗の仕業で、天狗が人間の姿に化けていたのだと結論づけました。

この伝説は天狗堂と毎年1月に開催される天狗祭りによって今に伝えられています。祭りは1月の第2月曜日に開催され、天狗に扮した参加者による行列や参拝の踊り、その他の儀式が行われます。